

「ではあなたは、どのような方法で職務を全うしたいとお考えですか？」

ナガタは目の前の青年に問うた。青年はパイプ椅子に姿勢良く浅めに座り、手を軽く握って膝頭に乘せている。一般的な会社の採用面接において模範的な座り方だ。

「はい、やはりロープを用いるのが良いかと思います」

青年はまっすぐ前を見て、迷いなく答えた。それはこの会社の採用面接において、模範的な回答だった。

「あなたはそのときが来たら我が社の利益のためにためらうことなく確実に実行することができますか？」

「はい」

ナガタは、その後もいくつか質問して、面接を終えた。青年が退出した後、ようやくといった感じでナガタは大きく息を吐いた。採用面接は受ける側の疲労は当然あるが、面接をする側にもしっかり残る。この会社の場合には特に。

今の子は採用だな、とナガタは思った。この後、役員をチェックは入るが、ほとんど形式的な物で、ナガタの意見が却下されたことはない。ナガタが採用だと思ったのならそれは採用だった。それはナガタがこの仕事を始めたときからそうで、はじめの頃、そのことを疑問に思い、上の人に聞いてみたことがあった。しかし一言、「信頼しているから」と説明されただけだった。その時は、なんとなくそうかと納得したが、いまだにその言葉ほどに信頼されているとナガタが実感したことはない。ただ、採用をする度に、その責任がナガタの肩にうっすらと積もっていただけだった。

「最近身体が重いな」

誰もいなくなった会議室で、ナガタの声が音を立てずに床に落ちた。

ナガタが勤めているのは、今流行の復讐代行会社だった。代行業者は、退職代行というサービスが生まれたのを皮切りに、現在に至るまで、様々な種類のサービスが生まれてきた。営業代行、謝罪代行、告白代行。中には議員代行なんてものも存在する。そんな数多ある代行業者の中で生まれた一つが復讐代行だった。

復讐代行会社は、文字通り復讐を代行する会社だ。言葉だけを聞くと、依頼者の代わりにターゲットに怪我を負わせたり、殺したりするのを思い浮かべるが、そうではない。捕まるリスクを負って、見知らぬ誰かに暴力を与える仕事なんて誰もやらない。復讐代行が行う復讐は、そんな暴力によるものではなく社会的な制裁だった。依頼者が復讐したい相手の地位を徹底的に貶める、そんな精神的攻撃だ。例えば、今一番メジャーな手口は痴漢の冤罪だった。ターゲットが満員電車に乗っているときに大声で「この人痴漢です」と言う。後で、電車を降りたときに勘違いだったと言って謝罪するが、もう遅い。同じ車両に乗っていた人たちにとってその人は痴漢をした犯罪者であり、動画を撮られ、写真を撮られ、直ちに拡散され、家庭は崩壊し、友人は離れて、出世は望めなくなる。もしそこまでいなくても、ターゲットの人生の歯車は確実に狂い始める。そういう社会的制裁をサービスとして取り扱うのが復讐代行会社だった。復讐代行はあっという間に広がり、同じようなサービスを提供する会社が乱立した。各々が、サービスの質や種類、料金の安さや補償の有無などで差別化をし、生き残りを図っている。ナガタの会社はその中の一つだった。

「まだ後3人面接が残ってるか」

ナガタはコーヒーを飲みながら、これから面接する3人分の履歴書にざっと目を通す。

「女、男、女」

履歴書の右上にはそれぞれバストアップの写真が貼られていた。写真の中の彼らは、一様にリクルートスーツを纏い、うっすらときこちない笑顔を浮かべている。学歴の欄には高校の卒業と、大学の入学卒業が記されているだけで、残り8行ほどは空欄だった。ナガタはその空欄を見るたびに「なぜ？」という思いに駆られる。「まだまだこれからじゃないか」と。実際に彼らにそう言ってやりたくなることもあった。しかしナガタができることは面接をすること。そして雇うか否か決めること。それだけだった。頭に巡るモヤを流しこむように、ズズとコーヒーを啜る。

ナガタの会社は、競合の多い復讐代行業界の中で、業績は上々だった。それは数年前に始めた新しい形の復讐代行サービスが好調だったからだ。そのサービスの名前は『自殺代行』。仕事を依頼されたら、『自殺代行』担当の若い社員が、復讐したいターゲットの家や会社の前で、ターゲットの名前と、ターゲットに対する恨み言を書いたプラカードを首からかけて自殺する。というものだった。

そんな若者をリクルートするのがナガタに任された仕事だった。

若者である理由は世間に与えるインパクトの多寡だけだった。はじめ、ナガタはそんな人材を集めるのは不可能だと思っていたが、そんなことはなかったらしい。世の中には思った以上に死にたい若者がいて、ナガタは、そんな若者たちの背中を少しだけ押せば良かった。自殺した社員には特別報酬として多額のボーナスが支払われること、この仕事をするには社会的な意義があるということ。この2点を求人欄に記載するだけで、自殺のきっかけが欲しかった若者が蟻のように群がった。

この若者たちは私が殺すのではない。私が背中を押さなくても、彼らはいずれどこかで自殺する。私は少しそのタイミングを調整しているだけ。そう自分に言い聞かせながらナガタは仕事をこなしてきた。しかし言い聞かせているだけだということはナガタ自身が一番よく分かっていた。

コーヒーで流しきれなかったモヤを頭に残したまま、ナガタが自分のデスクに戻ると、そこには新たな履歴書の束が山積みになっていた。頭のモヤが再び広がる。頭を叩き、深く息を吐く。気持ちを切り替え、仕事に取り掛かろうとナガタが椅子を引くと、椅子のキャスターがデスクに当たり、その振動で履歴書の山がドサと地滑りのように崩れた。ナガタの目の前で、腕のいいマジシャンによってテーブルに広げられるトランプみたいに、笑顔を浮かべた若者の写真が広がった。

翌朝、ナガタは自殺した。会社の恨み言を書いたプラカードを持って、会社の前で。